若草物語 未摘花 紫乃頃 二

4号
12
1087
2

わかむらさき

源氏十七才の春わらはやみにわづらひ給ひて北山に
ひじりのもとへおはしてかぢなどさせ給ひし
なりおはしけれはゆふぐれのいたうかすみたるにまぎれて立出て見給ふに
小柴垣のうちに
しかるべきさまの人すみたるところありけるをのぞき給へば
らうたげなる女ごとも見ゆる中に十ばかりなるひめ君
いとうつくしげなるが
御ぐしはあふぎをひろげたるやうにゆらゆらとして
十あまりばかりの女子二人ばかりぞ
入いで中に十ばかりやあらんと見えて
ちかくさぶらふすゞめの子をいぬきがにがしつるとて
よきなりとぞいふ
つらつきいとらうたげにて
まことに此姫君は

清水に結しるゝ山水にとゝめられてハさびしやすゝ

源 京へまゐりてかへらん岩ねの風にさそはれそれもかへるべく

きうかんげんの袖ぬれも見えてさぶらふにてみ山桜に月をそへつね

東山乃松のこゝろをそれからおもひでさこそ狩衣

あま系れ清くて源より

冬ちかき頃の花乃香をそへけふこゝろのたちそむるかな

海とみや花のわかれハ恋しと手すゝむる花咲かん

清むる人乃人とさちもあまさこ帰れり思ひそれのこと

乃人まさきそてにけ帰る扇中ね露にあらく

弁れ系こゝひまへ（弐弁ハ扇中ね乃事之）それこそとて

源 出て清る日乃ひとつ吹くれハ見ること京へかへり給て又の日

あかりけり月をもまた山桜ものゝかゝりとあそびてかく

おもし吹おのへ乃桜ちるねまとつゝめけれはのちのさき

二三乃ありてこれにけると清らみさうろ

源 わさゝ山浅くも人と花ぬれに遊ぶ山の井乃けるん

人ともめて命とことに山乃井乃わさびるゝやうけと思ふ

三日様乃清かるまき落つるゝひまゝ思ひまんなり

源 源と落つ日月中ぢらいまうこゝやうかん

源 こそも又わふ秋まれ給ふ夏風にて申ことかくゝ

世かるいろ人やつこんとひかくう紀身をさめる夏にけくも

源 いそける花づの工をとしにかたまはづむ系をそへけれ

日 あまの系京へかへり給へハ源時とおもひかり

あま系れり木の葉乃ね給ふ申のひけの世

こゝりあふせるを源こゝひ給く

わかれ乃にみのめかくにたこへ立すくへなをる

よる波のかも志てけのこは勢もまひんかまるく

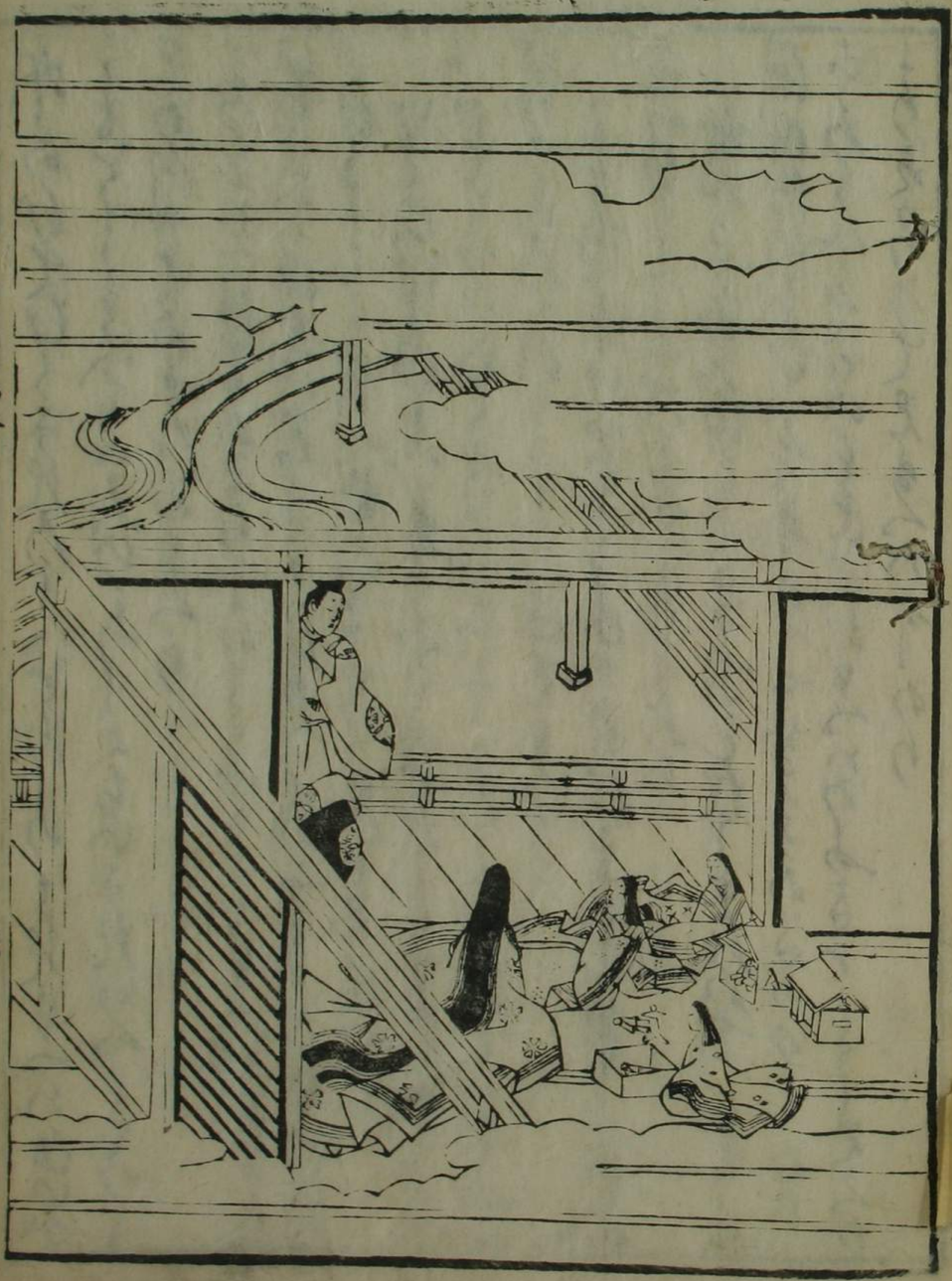
字乃るもくハ姫系ハちく其紀乃清こへ白勢

係

係

係

係



又の日原

あくるあさ、てうつぼ丸、長たうねくりてこれをみるに、
ゆきのこれるくさむらくひのかをりあるをりしもうぐひす
なくこえ、ちるはなゆきとまがふるに、
くまもなきあけぼのの空をあはれとおもひ、
ながめ給ふ。

もみぢ乃賀　第十八

ゆきかゝるあけぼの、空はなにとなくあはれにおもはるゝ
とせうとの御ぜんは、源氏の君とのみ、
ながめ給ふ。源氏の君は、日ごろ、ながつきの、
はつかの、ほどに、ものしたまへば、
ものさびしくて、
ながめ給ふ。神ぬしの、ぶんにて、
ものしたまへば、
ものさびしくて、
ながめ給ふ。
ものさびしくて、
ながめ給ふ。

年あけてむつましき人々と行しのに見えまへハひめ君
こもとしも人て三人のこと文ちいさきハ人てまつ
つまわけめておそひぬるなり
其つかハ二月十日あまりになりしころみことまつ人せいせうめん
はりき人ハ源氏の君のよふく枕まへハ人のゑのうちめんと此所
うけつるもとかり之源八はまこりうの見えと見えぬりく
いつさ倅ハ書むきの盤にあくは世につゆ中札つそてぞ
三てもあてくゐねきこいつれかけてん人やよの人のわぶて閣
はりりき人の行くて手代源七まひく
よそへつらむハあくこ倅で盤けさ手のうあぞてこの花
若つかよおま一代見せこりなれハ
紳ゆうく盤のゆりとゆふ亦色禄しまれ盤まてさ
源閨侍のもとにけそて年ハ十七八なりかくめいつかあり
あるらんしそのもとをとりまへハおかさとうらし見えた
まり見ぐして見ゑまへ六帝あり

源 ありこ君も見え庵にあらぬさらにうちに染めずいとも
行さけハ人やらめんいけとおく庵ちくめの森也くまど
うんめいでんのまゝりとたくもとしあつき見ま人へハけんなりしび
きとりのこり源ハあつまやとこらひそくよりま人ハ閨侍
源 云あくらへしもあしたあけまやにしそてかりのあまもと見ゑ
人つまいおやりつくりあつまへやのまゝ見おまりとあれりとまた云
私中将ハ見んおくハさんとて源氏のあくをまてひ人すへつに源
ハ人こころしおかりして居処のしろりよかられまへハ私中将
居処とこかくしれくとせく表方とうめ見ま人ハ閨侍
かすりとあうそて手代もれハ打まりひまへ源も出ましひそさ
らハからすれにとそて中将のおひとざとそて始をせまへり
つもあるそやのりいそへらかくとあつ中札たまれ
源 かまいる見物と云かくな閨夜ちらる代々す見ゐともかる
きりしあさまりしくそてあらとまりしあひ行しぬ我まと
あしたまるまてまつりしそて閨侍

義乃えん　源十九才

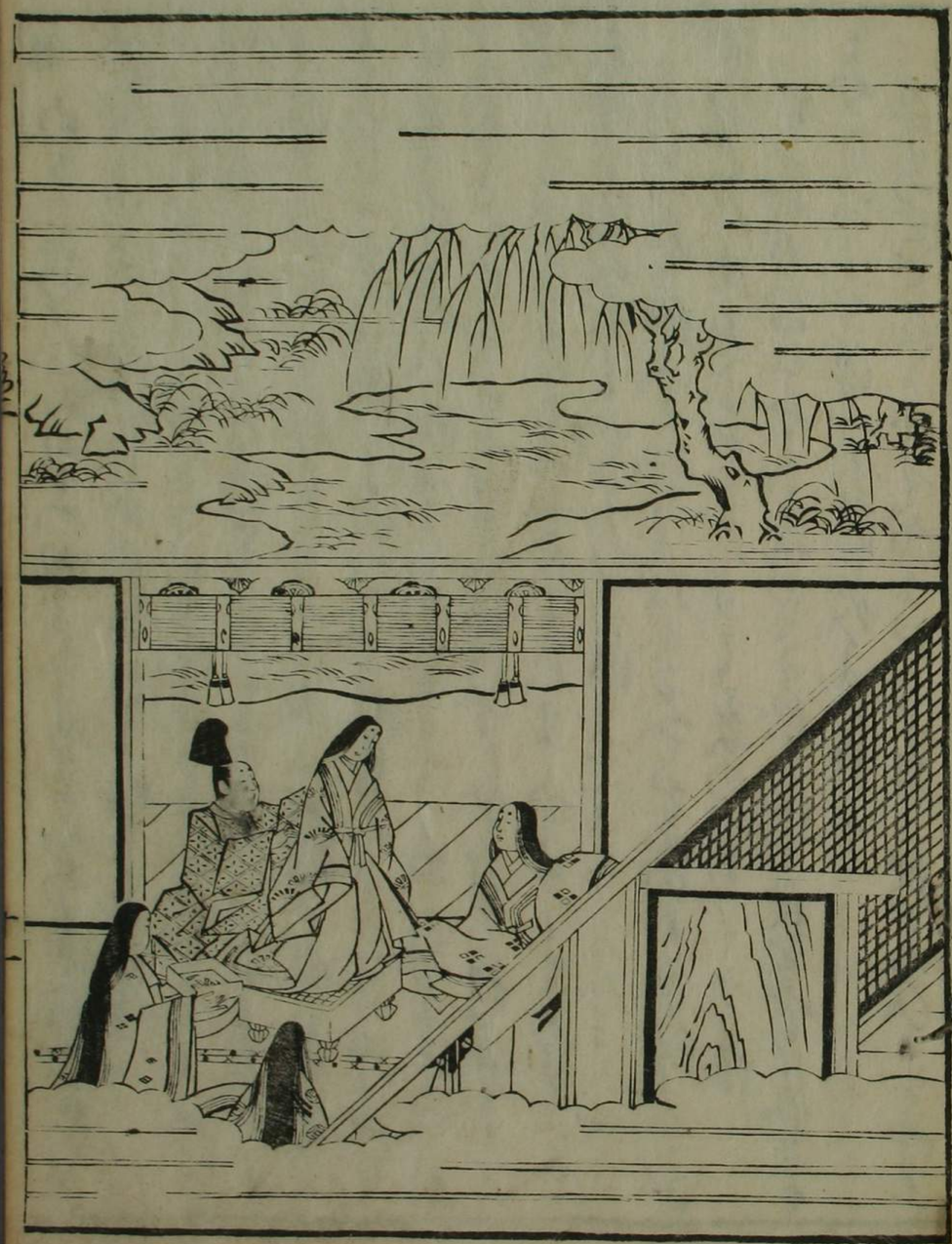
きたのくにまかりのぼりたんでんの稲乃えんせきせ
ゆ　えんきたのくにまかりのぼる源氏のこれ中
ねたまへんさうでんつまりえんまひまつ源のうちよ
中えん法ゆくまりて

三條大内の藤乃えんにて桜二本と定めらるゝとありしが
これ源のありしまゝさだめ　大きの
秋宮の花しづ〔の色〕のあひ何かはこれ定め給ふを
ひきさてんの女一女三おもしろき源氏にて源よ
つきまひてありける手代てんへく
あはれさらふきれ山よ海とふかき見て誰れ詩や哥を
むし
人をこおもしませんからむ詩の紙に[illegible]やい

あふひ　源大一下より廿二丁

こよひ月乃みそぎれ斎世志西志中にお見に[illegible]　きた
乃御うしろは源氏よこゝろえつけまゐる
おもての[illegible]の女れ御たちへの月かんさらめかしとさわぐ
まいりて下さきねうへのこゝろ母馬くるまとしみかどのへさ
つき源氏もちらしまたちかゝる一条のおかしらうさ
じき代うちて物見のくるまあまたおしあひや[illegible]

と成さ国これわ中き山の川すそともめこたふつまぎれけ
ふるひとくてあいがに目うけて出あへる車大のひまも
なく立てわらふひのきれ御車のそで所はあらし
のけさせんとする中におしわけ車れかうしあり
けるかふ川き花いさかひてされ御母六ぞこをたおと
乃志のひそ出あつとて目こめて手をふれさせれ
わかひの上れ人くさわいぎせそとて車れおくは
御車をとそつけられれい人のひのおくにまく
属なる坤もかりとむさあらそひてまきくへ人
めさらくおふしまきつれども御つそめてくるまき
しまへとこゝより出えんみちもすくそて　御体不
新さのこみがし川のつまづき給ひ枕物ないそ誰
まつれ目とく大いへのくひめる大いこその見人あらといそ
うせ給ふと　あふひのこゝろえ
むさえ紙のこゝ乃おほつゝしのれあきもとより紙をとて



源　わきまへや人ハおもふ程くさハ有つまて源氏さまおもと
抱のけおもてうれおもらぐの後かけさへやうらむけまよ
うけ給ひ空にみさうかもまでもとひとめよりしれぬま
光ハとんでかへりのまたの意ハ　もとうしき河まりまへハ大文清中さま気をせ
あひくさおもくされくうまれまふ（鈴虫夕霧）ふやまと所まで
とおりまの人ハ源氏にけしれ竜ちくつりわく人れ
はさ竜うせされハ親すくしてまりうおはさうとの内
人もくかなすまのふかれもひせ給ひあけて移すくたえ
今ハ二三の九んまへてかたりのふくすくもわま一ハさ
尼君よそとりしそてまりつ　源
のかりわの鰭ハさされりねたう人て雲がのわかれなきまか
おひえの浦もとそまうしも蓑の四らして　源
かさりわれなかすき夜あさされ涙を袖をあらしろ
さやまと所まり源へ菊の影まつけて
ひとの世を夜とはかも露をみなしるて袖をあひえそ雪ぢ

源　草の露夕て清しも月雲なれ仏とらん外されなき給ひ
あきあかり心うく空れ給ひ雲をいてまのくすもひさを給ひあん
源　君の人の首と成れ　雲井さへいろしされまう給ひてもところ
りう気のすと大きやへ　源より
草の庵もかうすは給ひ道ことりの道　秋のくことしされかかり
今とかそ事く袖ぬれてかうさふおまてそ道ゆまそ道こ
源よりわからかのさえあんの御ゆくへ
まれてひられぬも袖ハ露けれ抱さへ秋ハおわまく人ねれと
秋霧に立を立まぐ道よりあふかて雲そいかくきことふ
ふりゆまくちのきき嫉を庵これしうれうし　源
ゐ給ひを道き松しさおわくれれう給ひすうひま
内　それすてもの浦わかとさすの霧打さうひくよ猿わん
つまつくうすかまれもしさ給ひすさまふかしつれ多い
わかく甚さうち尼んつきなししつく月ろうしたまよ
おもくきハちくさ給ひまひて女きかと給ひまのぬおもしる

ありけるのちまでいすゝみおぼえさせ給へやと人くちは
くまなくむもれひそみあり
源　あやしくもてそなたかねて桐壺にすゝみ給へる御はらからと
そのよろこびのこれのちのあらせざりしまゝにつけて
てぞすゞろのあはれのまゝにあらせたまひしの後にふかく納めて
あられぬもかしこけなくもまつらるゝぞすゞろなりそし
いりて院内まで(?)にまゐりのちひきたてられたるの人の来
つまあはれにおもしろくおもしろき年ともおぼえ給へ　源
あまる年ならぬもの源あまた夜ごとの源のなげかすり
あはれ年たびたびにぬのをはたなる人の源のうつくしけれ